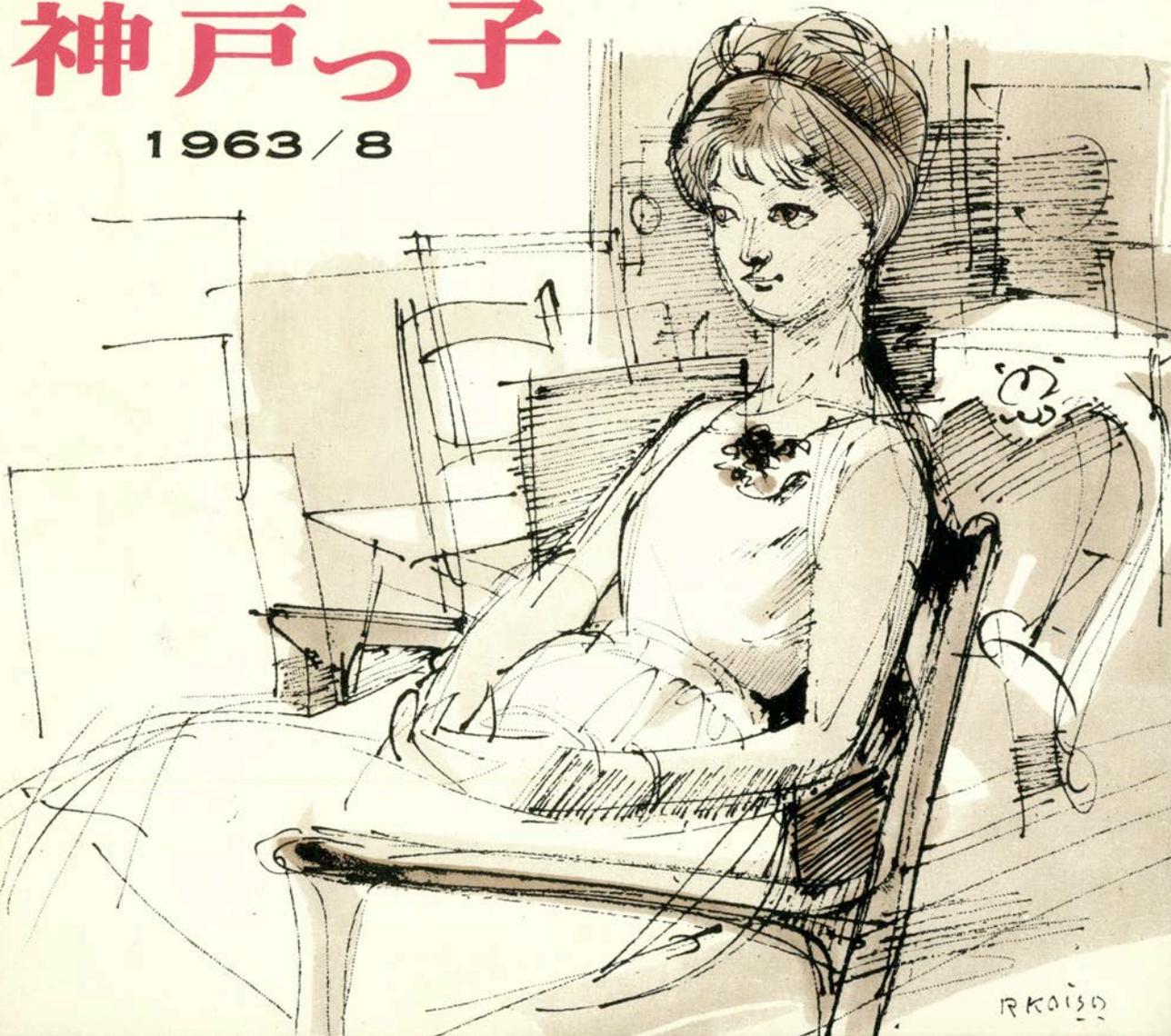


月刊「神戸っ子」昭和38年8月10日印刷 通巻29号 昭和38年8月10日発行 毎月1回10日発行

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

1963 / 8



RK0150

monthly magazine kobekko august 1963 no. 29



■ 大型バス・トラックのご用命は
兵庫日野ジーゼルへ TEL ④1191-5

日野
ゴンテツザ

神戸日野モーター TEL ④5771-5

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です



神戸人形挽歌／加藤盛男(神戸史談会)

神戸人形よ

黒ん坊の神戸人形よ

全てのものがそうである様にお前も、
もう亡くなってしまった。

あんなに少年の日に私の好奇心を
そそったお前だったのに

神戸人形よ

黒ん坊の神戸人形よ

布引の土産物屋の店に貝がら細
工と共に飾られていたお前を私
は何時までも見入ったものだ
た。

大正から昭和へと世の中が移り
変って元町の西洋人相手のギフ
トショップの人気物だったお前な
のに

ああ戦の嵐は多くの若い人の生命と
共にお前まで奪い去ったのだ。

神戸人形よ

黒ん坊の神戸人形よ

私はまぼろしにお前を想う
カット中西 勝(二紀会)

Fuchheim's

ドイツ菓子

ピラミッド
ビスケット
各種ケーキ

ユ-ハイム

本店・三宮生田神社西隣
神戸そごう・神戸三越・国際名菓店



COOL
IVY



夏をクールに、しかもアイビーに!!

一寸むずかしいコトです
しかし何事によらず賢明な
アイビー・リーガーのことです
きっとカッコよく、IVYな
サマースタイルを発明するでしょう
なにしろアイビー・リーガーは
インテリジェンスが売物ですから

おしゃれ洋品の **まがらぎ**

マック

三宮本店 神戸センター街
TEL ☎ 0895
トアロード店 センター街西口
TEL ☎ 0896
新開地店 新聞地本通り
TEL ☎ 7688
姫路店 姫路駅デパート
TEL ☎ 1261

神戸と女性

明星瑠美・花久仁子 (写真右より) 宝塚歌劇団花組

神戸の風景で、いちばん情趣の深いのは北野町の坂道。港の船も見える、回教寺院に異人館、このあたりの坂道には、開港文化の匂いがただよっている。明星瑠美さんも、花久仁子さんも、若い神戸っ子タカラジェンヌ、「二人とも、よく似ているって言われるんです」とニッコリ、いつも仲良く舞台でご活躍です。

(カメラ・米田昌弘)



印象にのこる贈りもの
ミキモトパール。心に
のこるだけではありません。
その美しさも永遠です。
ながくながく
お役に立つ宝石です。

 御木本真珠店

神戸店-三宮・神戸国際会館

Tel : 22-0062

大阪店-堂島・新大ビル

Tel : 361-0220

本店-東京銀座四丁目





8月 目次

- 1 神戸人形／文・加藤盛夫・え・中西勝
- 3 神戸と女性／明星瑠美・花久仁子（宝塚花組）
- 7 れんさい随想第12回／炎天の焚火・白川益
- 11 れんさい随想⑩／神戸のこと手当り次第
淀川長治
- 14 連載第1回／蒼い頁・阪本勝
- 19 連載第5回／神戸とエトランゼ
讚美しきり苦情ちよっぴり・陳舜臣
- 25 野の花対談⑩／すてきなお嬢さんこんにちわ、
きく人・岡部伊都子／話す人・大西文子
- 30 座談会／神戸をになって起て！
金井元彦・岡崎忠・田中寛次・牛尾吉朗他
- 35 涼しさを着る／福富芳美
- 39 暮しのアクセサリ③／アクセサリーの手入れ
矢野有尚
- 41 高校野球特集①／座談会
甲子園風雲録・坪田耕吉・須古治
西尾守一・峯本三一・来田健朗
- 47 ピンクコーナー（T）
- 50 高校野球特集②／400字アンケート
全国高校野球の想い出
- 53 わんぱく江戸日記／アスファルトジャングル
伊達俊太郎
- 54 神戸うまもん巡礼No.11 赤尾兜子
- 56 紳士入門⑥／英会話紳士・竹田洋太郎
- 53 ポケットジャーナル
- 62 KOBEKKO SHOPPING GUIDE
- 64 連載第4回／神戸夫人・武田繁太郎
- 68 神戸百店会だより

表紙・小磯良平／カメラ・米田定蔵・米田昌弘
デザイン・橋昭三

確信をもってタジマの目が選んだ
世界の宝石の名品！



スタールビー

宝石輸入商

タジマ

TAJIMA SHOJI CO., LTD
元町2・TEL ③0387・2552

炎天の焚火

白 川 渥 勝
え・中 西



今月の中央公論「雪後庵夜話」（谷崎潤一郎）を興深く読んだ。谷崎氏のような大家から「遅さの程度は朝の十時頃から晩の九時、十時、時とすれば十一時頃までかかって四百字詰原稿用紙三枚、余程工合のいい時に四枚であった」などと言う遅筆ぶりを聞かされると、遅筆無慙の私は省みて自ら慰む思いもするのである。「志賀君（直哉）も恐らく同程度だったろう。一日に一枚の紅葉山人よりは愛したが、芥川は私以上の遅筆家だったから、或は紅葉山人並みであつたかもしれない」云々。——これでは月産千枚の今日の流行作家とは、同じ世界の人種と思えない。戦後の量産主義が文士の名を作家に変えたが、作家とは正に作る機械であると言っている。

むかし、藤沢恒夫氏が遅筆家とは才能のない作家のことだと言うようなことを言っていたが、そして私も全く同感なのが、「雪後庵夜話」に出てくる直哉、万太郎、龍之介のような遅筆家を才能がないとは言えまい。つまりは、文士と作家の相違であろう。

ところで、私のような遅筆でも、戦後の作家稼業のために、やむなく駕馬に鞭打つような破れかぶれの十数年がつづいた。才無き上に、生来の怠け者と来ている。谷崎さんは「ものを書くことが楽しい」みなのだから、私は自分が遅筆であることを必ずしも悔みはしない」と言っていていられるが、私の場合、机に向かうことが厭なのである。ものを書くこと自体が苦業なのである。そこで、そんな自分の懶怠をねじ伏せるために、引き受けたのが新聞雑誌の連載物であった。ここ十年ばかり、私の作品は殆ど長篇ばかりである。連載物なら少年小説でも引き受けることにした。長篇小説に自信があったわけなどではない。ありようは、毎月毎日締切りに責め立てられて厭でも机に向わざるを得ない羽目（よめ）に自分を陥入れるためであった。

ところで、足かけ七年、毎日々々一回分三枚の日課でつづけて来たその新聞小説の仕事からやっと解放されて、私はいまホッと寛いでいる。この夏は、久しぶりに味わう暑中休暇である。真っ黒になつてゴルフに精励する一方、身辺の掃除に忙がしい。三日書を読まざれば面に垢を生ずと言うが、私の書斎には七年間の垢が溜っている。炎天の庭先で、その溜った古原稿やノートの山を片っぱしから塵埃焼却器で燃やしている。出るわ、出るわ。物置からも、反古をしまった石炭箱が幾箱も出て来た。さっぱりと過去を滅ぼすと言う作業は、案外に涼味があるものである。

その反古の中から、途法もない古いノートが出て来た。左様、むかしむかし詩人たらんと志して上京した頃の草稿である。私には滅ぼし難い過去。面のあからむ思いながら、一つ書きとめて置きたい

原 始

密林の梢に淪寂と霧が流れる

小鳥は霧を呑んで卵を生んだ

卵は新月の光を吸うて
寶石のように静かであった。

とつじよ、溪流の中で

岩は巨大な欠伸を放った

——そして又万年の睡りについた
岩は己れの中に神々を信じていた

ある日、雛が生まれた

雛はチチと啼いた

嶽をわたる雲の影が

浄らかな溪のそこひに届いて
空の祈りを伝えていた

こんな下手な詩よりも、詩を忘れて久しかったことに、私はテレ
ている。ともあれ、私の場合、遅筆は詩から出発したためかもしれ
ない。詩が散文にひっかかるふうなのである。
(作家)





コウベでみがく
世界の宝石

直輸入

神戸宝石

トアロード

大丸上ル 300メートル

タニジ

③ 2397

神戸のこと 手当り次第

淀川長治
え・中西勝



ウイルキンソンのレモネードが、いつでも台所の棚に並んでいた
トリアロードにいくと必ずコードリエでチョコレートを買った。
元町の三星堂にいくと紅茶はセットになっていて銀盆の上に銀の
ポットとレモンと砂糖とクリームと、そして大きなティー・カップ
は温められてのっかっていた。
ユーハイムでビスケットを箱につめてもらう。魚の形をしたビス
ケットが一番おいしい。フロインドリーブはチョコレートがうまい
布引の淹のブラック・エンド・ホワイトだったと思うがそこではコ
ーヒーをその場でいって一人前つつ熱湯でこして面白い筒のような
コーヒー容れでテーブルに出す。

目の前のみどりの迫る山肌には、くつきりと錨（いかり）のマーク（おゝなんとあのスマートなデザイン）の浮きぼりが、まるで上等のカーペットの肌ざわりで目にくいこんで、五分も散歩するともう布引の滝がそこにある。

下駄ばきで市電にとびのると、あッというまに須磨。タオル一枚に海水着を包んで、一日泳いで陽焼けして帰ってくると「なにしとんねん、今夜はみんなで弘養館のビブテキ喰べにゆくのかないの」と云うわけで、あわててシャツを着かえて、みんなでぞろぞろとあの二階にあがる。すると純白のテール布が目にもちよく、さあ出てきたビーフステーキの大きいこと。「あたしはよう焼いたほうやわ」「ほくは、ちよっと赤身のあるほうや」。その楽しいこと、そのうまいこと。

×

あれはもう四〇年まえの神戸。久しぶりでその神戸に行ってみた去年の夏。

「ああ、きたな」「えらい、ガラが悪いこと」これが本当に申訳ないが第一印象。

レインクロフォードもコードリエももうないのであろう。それがさがす気もなくなつて、ひとりオリエンタル・ホテルの二階からぼんやりと外を見て、海の匂いもメリケン波止場の匂いもうすれた外を見ているうちに「ああ、あほらし」とひとりつぶやいて風呂場のせんをひねって風呂にとびこんだ。

×

東京に来て、これが海かと江の島の砂の黒さにがっかりした。須磨の海が年々きたなくなつて……と聞かされて、それでこわごわ須磨のなんとかいうホテルのような食堂にあがって、ひと目、あたりを見廻したら、ああと声が出た。その美しさは横浜がくやしがつてあばれ廻つたとしても、これだけの美景はどこにもあるまい。それからその足でオリエンタルの支店のような舞子ヴィラに行ったところ、これはもうシネラマの中にサンソとオゾンがほんとに立ちこめて、目の前、手のとどくばかりを巨船がゆうゆうと白い波を描いて

これが神戸、やっぱり神戸はあったのだ。

この山、この海を……神戸っ子はいったいどうお感じなのであるう。

つい最近、横浜のマリン・タワーきんべんを散歩すると、海にそった山下公園が、まるでニューヨークのリバアサイド・パークのよう、みんなに愛されて、そろそろとその人の散歩スタイルもまるでアメリカ流。若い男女がとでもきれいで上品になっている。けれどもいかにも「海をいとしんで」「大切にありがたがって」……いるのである。

神戸はあの海あの山をどう……愛され美化運動に利用されているのであろうかと、これでもまだ神戸っ子のわたくし。心配。

かごいけ通りから布引。あの良さ。ロサンゼルスのレストラン・モニカへのドライブ・ウェイ・ムード。「あほくさ、大げさやこと」。云う勿れ。あんたは神戸にすぎず神戸がわからへんのや。

垂水から明石への海岸ドライブ・ウェイはロサンゼルスメリブの海岸ムード。とにかく山があつて海が、これがやわらかい海で、その、いかにも海らしい海。東京の海は黒い泥砂で、まるでグスイのでっかいような海。雲まで東京のアカが染っている。

神戸こそは日本一のハイカラな町で、神戸っ子のそのハイカラ感覚からくる洗練されたスマートさ、それが……今日……私には嗅いでも嗅いでも匂わない。匂うものは、行儀の悪い、厚かましい、安物にすっかり馴れた、バラケツのなれの果ての、一週間も風呂にはいらぬような神戸。これでよいのでありましょうか。

とこれだけニクッタラシイことをぬかしてをいたなら「コラ、アホ、お前さいきんの神戸もロクに見んと……ナンカシテケツカンネン」と……そう云って下さるであらうと、思いましてハイごめんやす。

連載隨想第1回

蒼い頁

阪本 勝

え・小松 益喜



ご縁があってまた連載ものを書くことになった。春の都知事選
らい、サカモトはいったどこに在るのだらうと思っ
多
い
よう
だ
か
ら、ま
ず
こ
の
ご
ろ
の
わ
が
生
態
の
ス
ケ
ッ
チ
か
ら
始
め
よ
う
去
秋
の
十
二
月
か
ら
東
京
市
谷
に
借
り
て
い
た
家
は、選
挙
が
終
っ
て
ま
も
な
く、四
月
末
に
明
け
わ
た
し
た。そ
れ
い
ら
い
は、兵
庫
県
東
京
市
谷
寮
や
ホ
テ
ル、友
人
の
家
な
ど
で
生
活
し
て
い
た。そ
し
て
七
月
の
始
め
に、や
っ
と
芦
屋
の
家
に
落
ち
つ
い
た
の
で
あ
る。
だ
か
ら
今
わ
た
し
は、東
京
に
家
も
ア
パ
ー
ト
も
持
っ
て
い
な
い。本
処
は
ど
こ
ま
で
も
芦
屋
の
こ
の
家
で
あ
る。

わが家は国鉄芦屋駅から北へ十丁足らずの山手にある。朝日丘というところで、国鉄芦屋駅から、阪急芦屋川駅からバスが出てわりあい便利なところである。

私は兵庫県知事を二期で引く決意をしていたから、去年の初めごろから、しきりに家を探していた。知事をやめれば知事公舎を去らなければならぬからである。東京、尼崎、芦屋と三軒あったわが家は戦災で焼失し、戦後は公職追放で有馬山中に浪居していたが、追放が解けたとたんに尼崎市長、ついで兵庫県知事と遍歴がつづいた。首長時代にはまがりなりにも公舎があったが、辞めるとどうしてもわが家を買わねばならぬ。ところが去年の十月、さいわいこの家が見つかったので、神戸の公舎を去ってここに移り住んだのである。

芦屋霊園、兵庫警察学校、芦屋病院などのすぐ下で、春は花一すじに咲き乱れる有名な桜並木に沿ったところだ。

あたりには人家もわりとすくなく、二階は東西南北ともひらけているから、四囲の眺望は緑一色である。昨秋は山腹をちりばめる紅葉を心ゆくばかり愉しんだ。

二階は三室で、むすめの部屋と私の書斎、それに寝室である。七月の盛夏、書斎に仰臥してあてもなく読書していると、蟬しくれと虫の音のほか何一つきこえない。山荘とまではゆかなくとも、まずそれに近い住心地である。

わたしは昔から早起きで、春や夏なら五時には床を出る。このごろの日課は、まず朝の山の散歩から始まる。神戸時代には公舎附近に散歩に適した場所がなかったので、散歩の好きなたしもあるきらめるよりほかなかった。それが苦しかった。しかしここでは自由に散歩が愉しめる。毎朝山の林道や霊園の奥をさまようて、胸ふかく暁の空気を吸いこむ。去年の秋からことしの六月にかけての東京生活の疲れが、日に日にぬぐい去られてゆくのがよくわかる。

血色もたしかによくなくなった。体重もすこし増えた。だいたい眼が輝やいてきた。知事時代はこんな眼ではなかった、もっと疲れていたがなあ、と鏡にむかってひとりごとを言う。

うれしいことは、去秋いらい歩け、歩けの訓練で、脚力の増した
ことである。首長十二年間、わたしはほとんど歩いたことがない。
マイカー族の生活は、わたしの脚の筋肉を弱らせた。これが不健康
の根本である。しかしそれも取りもどした。今ではどのような急坂
でも平気で登りきれぬ。しかも息ぎれがしない。二本脚の人間はす
べからず二本脚を活用すべきものだと思つてつくづく思つた。

どんなに暑い日でも、夕方になると涼しい山風が肌を撫でにやっ
てくる。そのころ裸になつて素足で庭に打ち水をする。苔むした大
きな庭石に水を打つと、昼間乾ききつていた縁が見る見るうちに蘇
える。その苔をべちやべちやたたいて空を仰ぐと、糸のような夕月
がかかっている。

わたしの書齋は東と南があいているが、寝室は南と西が透明ガラ
スの通しの窓である。月の夜は月丸が南窓から水のように流れ入り
西南の隅の柱をゆっくりまわつて西の空へ舞いてゆく。枕もとのオ
ルゴールのねじをかけ、月光を満身に浴びて眠りにつくときは、あ
あ、久しぶりの休息だなあ、と心でためいきをつく。そんなとき、
無精に自分がいとしくなる。一度より生きられない尊い人生だ。一
たびこの世を去れば未来永劫還つて来られないという、いのちとい
うものの悲しい約束を深く味わうべきである。そうと知れば、あま
い自分を虐待してはならない。ときにはわがいのちを静かにいたわ
つてやらねばならない。

カナカナ蟬が物狂おしく鳴き始めた。一日が終りに近づく、こ
の蟬はわん白小僧のように、駄々をこねてああして鳴くののだ。

夕闇が降りて来た。南の方に阪神間の灯がポツリポツリつき出し
た。遠くのアパートの窓の灯も、競うように増えて来た。夢のよう
に美しい。闇が深まるにつれて、灯がまたたき始める。かすかな琴
の音がきこえてきた。どこの佳人だろう。

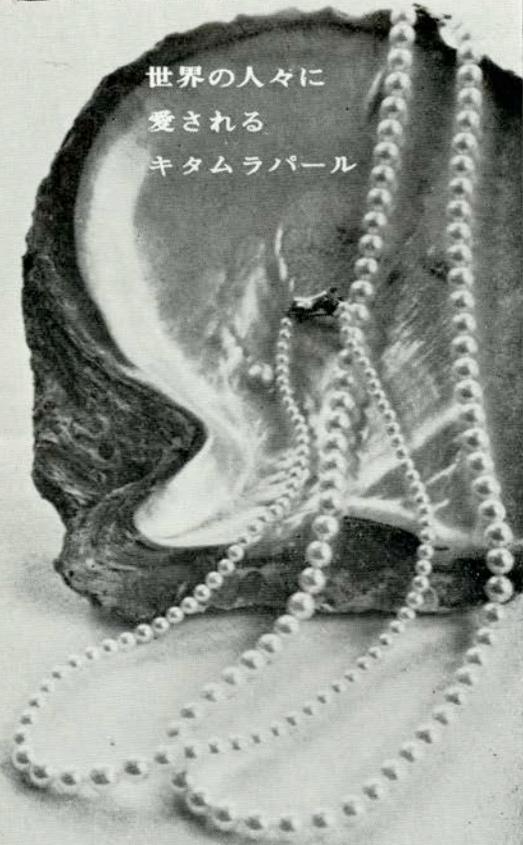
さきことはわからないが、わたしは当分ここを動かない。当分
とはどれほどの期間をさすのか、それも今のわたしにはわからない
人生という部あつい本のなかに、幾枚かの古い頁があつてもいいで
はないか。―七月下旬―

(随筆家)



北村パール

世界の人々に
愛される
キタムラパール



北村真珠株式会社

神戸 / 元町2・東京 / スキヤ橋センター
TEL. ③ 0072 (571) 8032

世界中の人からほめられた
日本の誇り 神戸のほまれ

マロング ラツセは ヒロタの 銘菓

元町通三丁目 TEL. ③ 二三四〇番

まごころこめた贈り物に

70年の伝統の味に新しい味覚をくわえてつくりあげたかずかずの銘菓……。
すばらしい風味と気品のあるデザインはどなたにも喜んでいただけます。
お気づかいの、新しいムーの贈り物に風月堂のお菓子をおえらびください。

 風月堂

神戸元町三丁目 TEL 3 695・696



O-SHIBATA

 柴田音吉洋服店

神戸・元町通4丁目 神戸4-0693

大阪・高麗橋2丁目 大阪231-2106

